

造影MRI副作用について

1, 造影剤の必要性：

造影MRI検査とは、ガドリニウムあるいは鉄分を含む薬を血管内に注射して行うMRI検査です。造影剤を使用することで病変の存在や性状がより詳しく描出され、診断に大変役立ちます。

2, 造影剤の副作用：

検査が安全に行われるよう努めておりますが、検査中や検査後しばらくしてから、以下のような**副作用症状が起きることがあります。**

軽い副作用（頻度 1～2%以下）

吐き気、嘔吐、頭痛、めまい、じんましん、発疹、かゆみ、むくみ、発熱、せき など

重い副作用（頻度 0.01%以下）

まれにショック症状（呼吸困難や血圧低下）を生じることがあります。

以下に該当する方は、造影剤の副作用が生じる頻度が比較的高く、症状も強く出る場合がありますので、造影検査を行わない可能性があります。

- ① 今までに造影剤を使用して副作用が出た方
- ② 気管支喘息や花粉症といったアレルギー性疾患のある方
- ③ ほかの薬剤でアレルギーが出たことのある方

3, 副作用の予測について：

初めて造影検査を受けられる方、これまで造影剤で副作用が出たことのない方が、今回の造影検査で副作用を起こすかどうかをあらかじめ調べる方法は、現在のところありません。

- ・ 以上の説明を御理解いただいた上で、別紙の問診票と同意書に御署名をお願いいたします。
- ・ 同意が得られない場合には造影検査を行いません。
- ・ 同意書に署名をいただいた場合でも、いつでも造影検査を拒否することが可能です。
- ・ 造影検査を拒否された場合も、その後の診療において不利益を被ることはありません。

造影剤を用いたMRI検査を受けられた方の中には、検査終了後に遅れて副作用が見られる場合があります。（遅発性副作用と言います）症状が出るのは検査終了後1～2時間程度から数日後まで幅がありますが、その頻度は判明しておりません。

遅発性副作用は一般に軽い症状が多く、頭痛、吐き気などの症状と、かゆみ、じん麻疹などの皮膚症状が主なものです。極めて稀ですが、呼吸困難や血圧低下などの重い副作用が遅れて出る場合があることも報告されています。

副作用がみられた方へ

かかりつけ医に電話をし、かゆみ、発疹、不快感等の症状を報告し、かかりつけ医の指示に従ってください。連絡がつかなかった場合は、その日の当番病院または救急病院を受診されてください。